

課題設定による先導的人文学・社会科学研究推進事業  
領域開拓プログラム（研究テーマ公募型研究テーマ）  
評価用研究成果報告書

課題		行動・認知・神経科学の方法を用いた、人文学・社会科学の新たな展開			
研究テーマ名		歴史科学諸分野の連携・総合による文化進化学の構築			
研究代表者	所属機関	東京大学			
	部局	大学院理学系研究科			
	役職	講師	氏名	井原泰雄	
委託研究費		単位：千円			
平成26年度	平成27年度	平成28年度	平成29年度		
2,000	3,450	3,200	2,700		

### 1. 研究の概要

研究目的、研究内容、成果や波及効果等、実施した研究の概要について、簡潔に記述してください。

#### 研究目的・研究内容

人間の文化は、ヒトという生物種により生み出される広い意味での自然現象であると同時に、それ自体が半ば独立した変化の原理と歴史をもつ現象として、人文学・社会科学の研究対象となっている。このため、文化の歴史について深い洞察を得るためには、その生物学的基盤から、社会伝達、変容過程に至る総合的理解が必要である。本研究は、進化学、考古学、認知科学、科学哲学の研究者が共同し、各分野の理論・方法を動員して文化の歴史研究を実践することにより、文化進化学という新領域を形成することを目的とした。また、これにより特定分野の視点に偏らない文化の歴史の理解を目指すとともに、歴史学の関連分野における細分化を解消するための道を拓くことを意図した。

実施した主な研究として以下が挙げられる。(1) 日本の縄文・弥生時代の移行を示す遠賀川式土器について、その形態データを、楕円フーリエ解析・主成分分析を用いて定量的に分析することにより、地域間の伝播過程を検討した。(2) 縄文・弥生時代の受傷人骨のデータを用いて、当時の暴力・戦争の規模について定量的な分析を行い、その結果に基づいて、先史時代の狩猟採集民において集団間闘争が普遍的であったとする従来の主張を批判的に検討した。

(3) 古墳時代における前方後円墳の形態の歴史の変遷について、幾何学的形態測定学の手法を用いた分析を行った。(4) 20世紀の日本で大規模な出生減少を引き起こした丙午迷信について、出生率のデータから日本各地における迷信の普及程度を推定し、経時的データから、地域間の迷信の伝播について数理的手法を用いて分析した。

#### 成果・波及効果

本研究の実施過程で、文化の歴史について関連諸分野の理論・方法を駆使した横断的分析を行うという当初の目的は十分に達成された。個々の研究の成果は学会発表等を通じて発信されており、特に上記(2)(4)の成果については、原著論文として国際学術誌に発表した。これらに加えて、研究成果をまとめた論文集を2017年8月に出版する予定である。また、本研究と関連したシンポジウムの開催、インタビュー、雑誌への寄稿を通じて積極的な発信を行っている。本研究の成果は国内外のメディア（Washington Post、朝日新聞、日経新聞等）でも紹介された。本研究により、隣接分野の若い研究者や大学院生を巻き込んで研究の幅が広がっていく手応えを感じており、我が国における文化進化学の形成に貢献できたと考えている。